

2014年11月20日「神からの賜物」

＜ 聖書箇所 ＞ 「ローマ人への手紙 12章1節～5節」

兄弟たちよ。そういうわけで、神のあわれみによってあなたがたに勧める。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい。それが、あなたがたのなすべき霊的な礼拝である。あなたがたは、この世と妥協してはならない。むしろ、心を新たにすることによって、造りかえられ、何が神の御旨であるか、何が善であって、神に喜ばれ、かつ全きことであるかを、わきまえ知るべきである。

わたしは、自分に与えられた恵みによって、あなたがたひとりびとりに言う。思うべき限度を越えて思いあがることなく、むしろ、神が各自に分け与えられた信仰の量りにしたがって、慎み深く思うべきである。なぜなら、一つのからだにたくさんの肢体があるが、それらの肢体がみな同じ働きをしてはいないように、わたしたちも数は多いが、キリストにあって一つのからだであり、また各自は互に肢体だからである。

＜ 説教抜粋 ＞ 「神からの賜物」

今日の説教の題名は、「神からの賜物」です。聖書では、ローマ人への手紙 12章1節～5節です。「兄弟たちよ。そういうわけで、神のあわれみによってあなたがたに勧める。」。ローマ人への手紙の著者はパウロです。パウロの思想が成熟した晩年に、この手紙は書かれました。12章1節までは勧めの言葉が一切書かれていないという特徴があります。

つまり、ローマ人への手紙の前半部分は、パウロの考え方が紹介された箇所であると考えられます。その土台の上で、「そういうわけで、神のあわれみによってあなたがたに勧める。」となります。この箇所以降には、パウロの勧めの言葉が綴られます。「あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい。それが、あなたがたのなすべき霊的な礼拝である。」。

私たちの体をささげるということは象徴的な意味で、私たちの考えや生活を清くしなさいということの意味していると考えられます。それでは、どのような生活が霊的な礼拝を捧げる生活なのでしょう。「あなたがたは、この世と妥協してはならない。むしろ、心を新たにすることによって、造りかえられ、何が神の御旨であるか、何が善であって、神に喜ばれ、かつ全きことであるかを、わきまえ知るべきである。」。

この世と妥協しないということは一体何を指しているのでしょうか。まずは、私たちの生活の中で何が大切であり、そして、何が善であり、逆に何が大切でなく、むしろ悪なのかと

いうことを、はっきりと認識することが必要です。そのうえ、私たちは、こうした価値観を中心とした生活をして行く必要があります。また、この世というのは一体何を指しているのでしょうか。

これは、従来の価値観、もしくは世俗的な価値観を指していると思われます。つまり、一般の価値観と、神様を中心とした価値観が異なっているということを、私たちは、認識しなければなりません。それでは、当時、どのような葛藤があったのかを少し考えてみたいと思います。

「わたしは、自分に与えられた恵みによって、あなたがたひとりびとりに言う。思うべき限度を越えて思いあがることなく、むしろ、神が各自に分け与えられた信仰の量りにしたがって、慎み深く思うべきである。なぜなら、一つのからだにたくさんの肢体があるが、それらの肢体がみな同じ働きをしてはいないように、わたしたちも数が多いが、キリストにあって一つのからだであり、また各自は互に肢体だからである。」。

なぜ互いのことを尊重すべきだと書かれているのでしょうか。当時の人も恐らく、人間関係で悩み苦しんでいたのではないのでしょうか。つまり、一般の価値観と、キリストを中心とした価値観のせめぎ合いがあったようです。それだけでなく、教会内部にも様々な価値観があり、そこにもせめぎ合いがあったと考えられます。

イエス様が生きておられる時にも、弟子たちによる、誰が最も偉いのかという論争がありました。こうした論争の中で、イエス様は問題を提起しました。それは、あなたたちの真ん中に立っている小さな子供が最も偉いということです。このような弟子たちの軋轢は、今日的な問題でもあります。人間関係を良くして行くためには、もちろん、互いを尊重すべきです。

しかし、それには前提があります。それは、私自身が、神様から与えられた、価値ある存在であるということに対する確信を持つことではないかと思います。その価値は、私の隣にいる人にもあてはめることができるのです。今日の説教の題名は、「神からの賜物」という題名です。神様から与えられた賜物とは一体何でしょうか。それは正に、私たち一人ひとりの価値なのではないのでしょうか。